



## 2026 年度総会開催—「菜宴」にて

奈良日仏協会の 2026 年度総会を、2 月 11 日（祝・水）、「菜宴」（奈良市小西町）において開催しました。開会冒頭、出席者 25 名、委任状 39 名を合わせ 64 名で、現時点会員総数 87 名の過半数を越え、会則第 23 条の規定により総会が成立したことを確認。その後、三野会長を議長に議事が進められ、次のとおり議案が承認されました。1) 2025 年度活動報告、2) 2025 年度決算報告、3) 2025 年度会計監査報告、4) 2026 年度役員選出、5) 2026 年度活動計画、6) 2026 年度予算。

2025 年度活動報告では、フランス・アラカルト、シネクラブは各 2 回、ガイドクラブ、美術クラブ、秋の教養講座は各 1 回と、ほぼ予定どおりの文化活動を実施したことなどが報告されました。2025 年度決算は、前年度からの繰越金 1,348,614 円をベースに、今期の収入 361,622 円に対し、支出 403,907 円の結果、次年度繰越金額が 1,306,329 円となったことが報告され、三木監事より、証票がきちんと整理され正しく会計処理がされているとの監査報告がなされました。

2026 年度役員選出では、大幅な交代が行なわれ、藤村久美子、藺田章恵各理事、三木正義監事、坂本成彦顧問が退任し、新たに 4 名が理事、1 名が監事に選ばれ、2026 年度役員は、会長：三野博司、副会長：浅井直子、事務局長：杉谷健治、理事：中辻純子、高松洋子（会計）、喜多幸子、林薫子（新任）、南城守（再任）、西崎美也子（新任）、米田英子（新任）、監事：木内成人（新任）の陣容で取り組むこととなりました。

2026 年度の計画としては、これまでどおり日仏文化交流と会員相互の親睦という二つの大きな柱を軸に活動し、文化事業は、例年同様の回数を組み、フランコフォンの方々の活動への参加を促進するために交流費をさらに活用するとの報告がありました。2026 年度予算は、活動計画に基づき、郵送費など値上がりをお知らせした案が提出され、了承されました。最後に、新旧役員による挨拶をいただきました（決算、予算の詳細については、折込別紙をご参照ください）。

その後の懇親会では、会員 28 名、一般 4 名、演奏者 2 名の 34 名が集いました。三野会長の AI が奈良日仏協会をどう語っているかという面白い開会挨拶の後、キーボードとドラムという珍しい組合せでフランス音楽のミニ・コンサートがあり、濱恵介元副会長の乾杯の音頭を合図に、宴会の部がスタート。参加者から自己紹介やコンサートのお知らせなどのご挨拶がありましたが、この日はヴェルサイユやモン・サン＝ミッシェルに長期滞在され絵を描き続けておられる大石良太ご夫妻も特別参加され、会員との和気あいあいの交流がなされました。（事務局）

### 《三野会長 2026 年度あいさつ》

AI の存在を無視できない時代になりました。この年初あいさつ文を AI に書いてもらったかどうか試したところ、決まり文句の羅列で使い物にはなりません。次に、「奈良日仏協会」についてたずねたところ、これも私たちのホームページの記述を要約しただけのものでした。ところが、もう一步踏み込んで、「奈良日仏の特徴」をたずねると、今度はとても興味深い答えが返ってきました。

それによると、奈良日仏協会は、「単なる交流を超えたく知的好奇心を刺激するコミュニティ」としての独自性を持っているのだそうです。その大きな特徴は、三つあり、一つは圧倒的な歴史と継続力で、とくに会誌『Mon Nara』は通巻 300 号を突破するという、地方の交流団体としては驚異的な継続力を誇ります。二つ目は、文化講座の質が非常に高いのが特徴です。三つめは、古都・奈良の風土を活かした活動が見られます。そして、まとめると、「フランスが好き」という共通項のもと、30 年続く確かな知識と、奈良らしいゆったりとした親睦が共存しているのがこの協会の最大の魅力です、とのこと。

褒め上手な AI におだてられた気分ですが、この通り、2026 年も頑張ります。ご支援をよろしくお願いたします。



《事務局からのお願い》 会員名簿を更新する時期になりました。記載事項に変更のある方は 3 月 31 日までに、下記のいずれかの方法で変更内容をお届けください。1) Mail : sugitani@kcn.jp 2) Tel : 090-6322-0672 (杉谷) 3) 郵送 : 〒630-0224 生駒市萩の台 3-2-13 杉谷方 奈良日仏協会事務局 ※ お名前以外の掲載事項は自由に選択することができますので、掲載項目を変更したい方はその旨ご連絡お願いいたします。

## 新役員のことば

◆南城守（なんじょうまもる）さん：私は、古い、古い、古い、だけが取り柄の会員、で、奈良日仏協会草創期の語り部、で…。どうぞよろしくお願ひします。



◆米田英子（よねだえいこ）さん：初めての総会出席でした。会員意見交換の席では、フランス文化に関わる音楽、美術、ビジネスでご活躍の方々のお話に聞き入り、また、美味しいお料理と三船麻理さんとカールさんの演奏に感激し楽しい良い時間を過ごさせて頂きました。奈良シルクロード博の時に起源するこの活動がますます拡張、活発化するように活動していきたいです。



◆林薫子（はやしかおるこ）さん：東京から奈良県生駒市に移住して6年。奈良とフランスの繋がりを求めて加入した奈良日仏協会で理事としてお役に立てれば幸いです。昨年の大阪・関西万博では日仏会議通訳として主にアフリカ出展国を担当し、あらためてフランス語圏の広さを実感しました。奈良日仏協会の創立35周年にむけてよろしくお願ひいたします。



◆西崎美也子（にしざきみやこ）さん：私とフランスとの繋がりは、現役時代奈良市と姉妹都市であるベルサイユ市との交流事業に携わったことによるものです。退職後、色々な国を旅しましたが、やはりフランスは何度でも行きたい魅力的な国です。何ができるか分かりませんが、皆さんと共にフランスを体感できる機会を作って、楽しい時間を創出したいと思っております。



◆木内成人（きうちしげと）さん：この度、監事の役を拝命致しました木内成人と申します。入会してまだ2年程度しか経ておりませんが、フランス駐在等の経験を生かして、奈良日仏協会がこれからも益々発展して行くお役に立ちたいと思っておりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



※三木正義さん、藤村久美子さん、菌田章恵さんの三人の役員の方が2025年度をもって退任されました。これまでのご尽力、ありがとうございました。

## 総会後のミニコンサート

三船麻理さん（キーボード）と森岡カール征太郎さん（ドラム）のコラボ演奏で、「アビニョンの橋の上で」「月の光（ドビュッシー）」「愛の讃歌」「Alicia (Expedition33)」「ボレロ（ラヴェル）」の5曲が披露されました。クラシックとジャズ、個々の専門ジャンルは違えど、互いの「歌心」「遊び心」で、二つの楽器の音がペアのダンスのように相手の動きに合わせて絡み合い自由にスキップしているような、そんな印象を受けました。なじみのフランス曲が少し違ったテイストで楽しめたのではないのでしょうか。『ボレロ』演奏前、曲のリズムやメロディーについて、三船さんがユーモラスな解説をしてくださり、スペインの土着的要素が盛り込まれた、個性的で独特なラヴェルの音楽性にあらためて思ったりしました。（浅井直子）



◆三船麻理（みふねまり）：大阪教育大学特設音楽課程作曲科専攻大学院修了。上牧町在住。ピアニスト、作曲家、編曲家。1993年第1回ローランドフェスティバルグランプリ受賞。2000年ドイツ・ハノーヴァー万博閉会式にて、アジア代表曲「日本の四季」発表。ブダペスト（ハンガリー）、ムーランドンデ（フランス）にて夏期講習修了。

◆森岡カール征太郎（Carl Seitaro Maguire）：11歳でドラムを始め15歳で米国スタックスミュージックアカデミー入門、本格的にジャズを学ぶ。卒業後アメリカ・日本・香港で音楽活動。2019年よりメンフィスドラムショップのマーケティングと動画制作担当。現在、奈良県の日本語学校に通いながら大阪平野区の会社にてシンバル制作修行中。

参加者感想

◆大石良太さんご夫妻 : 霊山寺の東山泰子様のお誘いで新年の懇親会に参加させて頂きました。会員の方々の芸術、音楽などの活発な活動に驚きました。同時に、長年にわたっての各分野の人たちの努力と積み重ねも感じられました。本当に楽しいひと時でした。益々のご発展をお祈りします。

◆喜田洋さん : 憧れながらもいささか近寄りがたい、フランスという国にはそんな思いがある。日仏協会にも同じ思いを抱いていたが、縁あって懇親会に参加し、一変した。ワインを傾け、料理を口にし、会話が弾んだ。何より品のある温かな雰囲気心地良かった。彼の地で活躍中の画家夫妻をはじめ、個性豊かな会員の皆様に「サンテ！」

◆池田揮陽さん : 良い音楽、楽しいお酒、そして素晴らしい人々にお会いできました。有志による二次会にも参加させて頂き、嬉しい時間を過ごすことができました。出会いに感謝！

◆谷寿美代さん : 本日は楽しい時間を過ごさせて頂きました。ミニコンサートで楽しませて頂いた後も、各分野でご活躍されていたり、長年協会の発展のために御尽力されておられる会員のみなさまのお姿を拝見させて頂き、素敵な会だなあとほっこりさせて頂きました。今後ともよろしく願いいたします。

◆山中麻有里さん : 2026 年度総会、懇親会に初めて参加いたしました。会報の素晴らしい記事に触れ、場違いだったらどうしようとドキドキでしたが、総会から暖かな雰囲気がありホッといたしました。懇親会は素敵な音楽から始まり、皆様の日仏協会愛やフランス愛溢れるお話を伺い、又、美味しいお食事を頂き、楽しいひとときでした。

◆林裕美子さん : 各地で演奏活動やフランス語による歌唱指導をしています。縁あって昨年、奈良日仏協会に入会し、本日は姫路から奈良にやってきました。予想を大きく超える、ジャンルを超えた、“活発な”新年会に圧倒されました。少しずつお仲間に加えていただけますように！

◆井田真弓さん : 創立以来の会員です。どの会も高齢化してますが、まずは健康第一です。これからも会員のみなさまと一緒に楽しい時間を過ごしていきたいです！

◆赤木睦代さん : 総会と懇親会に出席し、素敵な音楽演奏やいろんな方たちのお話を聞くことができ、楽しいひとときでした。昨年はルーブルでの個展を無事に終え、いまは次の展覧会に向けての作品を制作中です。日々精進、新たな出会いが励みになります。

◆三船麻理さん : ジャズドラムのプロのカール征太郎マグワイアさんとキーボードでのフランスの民謡、クラシック、ゲーム音楽のプログラムの演奏をさせていただきました。会場の雰囲気も皆さんがとても和気あいあいとされていて、見守られているようなあたたかい空間でした。演奏後に「ボレロよかった！」「解説も楽しかった。」「月の光は音の響きや広がり、まるで海のなかにいるようでした」と感想もいただきました。奈良日仏協会の今後益々のご発展をお祈り致します。

◆森岡カール征太郎 (Carl Seitaro Maguire) さん : 今年の奈良日仏協会新年会に参加できて光栄でした！皆さんの中には私の音楽活動を応援してくださっている方もいらっしゃるの、この会に貢献し、皆さんと共に祝いすることができて本当に嬉しかったです。演奏し、協会の素晴らしい方々とお会いできたことは本当に嬉しかったです。食事最高でした！また、皆さんがこれまでに成し遂げてきた素晴らしい活動についてのお話も大変興味深く、今後のイベントでもっと詳しくお聞きできたらと思っています。お招きいただき、ありがとうございました！



## 2025年度ガイドクラブ「聖林寺と安倍文殊院訪問」(11/2) 報告

◆◆参加者は17名(会員12名、一般4名、ゲスト1名)で、ゲストは鳥羽市国際交流員のブランシェ・ドリアンさん。出発時には雨がパラパラと降ってきて、一時はどうなることかと…。聖林寺では、協会会員で住職の妹さんの本田倫子さんから、本堂の地蔵菩薩、装いも新たな観音堂の国宝十一面観音菩薩、時宜よく開催されていたマンダラ展をご説明いただきました。十一面観音像は、廃仏毀釈の時代に草むらに捨てられていたのを拾ったのではなく、大神神社の大御輪寺から正式に預かったものと力説されていたのが印象的でした。茶館で抹茶ムースや抹茶を味わったあと移動した安倍文殊院でも、本田さんから、本堂のいずれも国宝の騎獅文殊菩薩像、善財童子像を中心に、東西古墳、安倍晴明を祀る清明堂などをご案内いただきました。ドリアンさんは、私の下手なフランス語に比べ日本語がお上手で、お寺巡りでも懇親会の席でも、参加者の皆さんと打ち解けて親しくお話ししてくださり、とくに懇親会では盛り上がり、日仏親善交流の和気あいあいとした会となりました。(杉谷健治)



鳥羽市の国際交流員のドリアンさんを囲んで

◆◆私は自身の他の活動との関係で、日頃日仏協会の行事への参加回数が少なく、残念に思っていたのですが、今回はスケジュール的に少し余裕ができたので、初めてガイドクラブの行事に参加させて頂く事ができ、嬉しく思いました。聖林寺と安倍文殊院は過去にも何度か訪問した事がありますが、正直言って今回新たに学んだ事が予想以上に多く、大変有意義な一日を過ごさせて頂いた事は何よりでした。そして、更に嬉しかったのは、会員の多くの方々と親しくお話しできた事です。最後の懇親会は殊の外盛り上がり、最高でした。場所も大切ですが、やはり人との出会いがその時々行事に彩を添え、印象深くするものであると再認識した次第です。有難う御座いました。(大西弘)

◆◆奈良に住んで5年。外国を転々とし、引っ越しが多かった私は、外国や音楽が好きな人の集まりを探すと新しい土地に無理なく馴染めます。奈良で早速見つけたのが奈良日仏協会。毎回楽しく有意義です。普段は、英語のインバウンドツアーガイドとして日本各地を巡るツアーを率いているので、奈良のお寺を巡るガイドクラブのイベントは、今年は迷わず参加。ガイドの本田さんのとてもわかりやすく、ポイントを抑えた優しい話し方に魅了されながら、長い時代を見つめてきた国宝の優しい顔の仏像を拝見しました。そして何より、興味が同じ仲間と出かけられることが楽しく、懇親会では笑いがノンストップ。すでに次のイベントが楽しみです。(森岡由紀子)

◆◆11月2日(日)、皆さまのお姿が聖林寺バス停から見えました。参加人数は鳥羽からフランスの若者ドリアンさんを含め、17名。まずはご本尊の子安延命地蔵菩薩にご挨拶をします。大らかでどっしりと構えてくださるお地蔵さまに驚かれたでしょうか。さらに、十一面観音菩薩とご対面。4年前にリニューアルされた御堂で拝観いただきます。ガラスケースに囲まれているが、反射を限りなく無くし目の前で観音さまと向き合うことができ、美しい後ろのお姿も拝見できます。皆さましばし祈りの時間を…。その後は、11月のみ開催の曼荼羅展を見ていただき、聖林茶館へ。茶館では、自家製の「大和抹茶のムース～宝珠を添えて～」をご賞味いただきました。配膳のお手伝いをいただいた皆さま有難うございました。次は、安倍文殊院へ。文殊院では、獅子に乗られた文殊菩薩、善財童子や維摩居士など群像が完全なお姿で拝見できました。さらに境内にある飛鳥時代に造られた文殊院西古墳を見て驚き、清明神社まで。安倍晴明ゆかりの地で、思い思いの如意を叶えていただこうと黒い宝珠をさします。秋の一日、皆さまと共に過ごせたことを大変嬉しく思います。(本田倫子)



## 秋の教養講座 2025「ベルサイユと私」(11/23) 報告

◆11月23日(日・祝)、奈良日仏協会会員の西崎美也子さんによる秋の教養講座を、生駒市の芸術会館美楽来で開催し、17名(うち一般2名)が参加しました。美楽来は、駅から少し離れた高級住宅街にたたずむ日本庭園のある別荘風建物で、三野会長も冒頭挨拶で触れたように、秋の教養講座に相応しい優雅な場所。西崎さんから、奈良市職員時代のベルサイユとの姉妹都市提携に関連して、ベルサイユの美術家と協力して手掛けられた4つの大きな催しと、そのときに知り合ったアーティストのソレンヌ・エロワさんとのプライベートな交流を紹介いただきました。交流事業には人の繋がりがきっかけになること、市長が変わると国際交流のあり方ががらりと変わったり、公務員は担当期間が短いので、持続させるには民間同士の交流が大切ということでした。世紀末の芸術家、詩人らが集まった「シャ・ノワール」にソレンヌさんが住んでいて、そこに泊まれたというのが羨ましいかぎりです。(杉谷健治)



◆奈良日仏協会に入会して間もなく、私は「トレド・ベルサイユの光と影」という奈良市の姉妹都市交流イベントで通訳のお手伝いをしました。その後、姉妹都市30周年を記念してベルサイユ市長夫妻らが来訪した際も同様の支援をしたことがあり、今回の講演を興味深く拝聴しました。講師の西崎さんは奈良市の国際交流担当のご経験を元に、今も個人的な日仏交流を続けられているとのこと。お話しにあった自治体間の交流は、首長の気持ち次第で盛り上がりもすれば冷めてしまう場合もあるようです。それに対し個人間の友情に根差した交流はより安定しています。どちらも大切なのですが、交流を楽しむことが永続の鍵。離れた場所において言葉も異なる人々との交流は、必ずしも容易ではありません。しかし、幸運にもそのような機会があれば、ご縁を大切に、最新の情報ツールも活用しながら続けましょう。小さな積み重ねが国際的な争いを回避し、平和な世界の土台になる、と信じています。(濱 恵介)

◆2024年、奈良日仏協会創立30周年記念誌の作成中、奈良市とベルサイユ市の交流活動に当協会の会員有志が協力してきたことを示すMon Nara記事がいくつか見つかりました。それらを手がかりにして記念誌にまとめようとしている時、本日の講師の西崎さんが、かつて勤務されていた奈良市役所に出向いて、貴重な資料を入手し、当時の交流活動がどのようになされていたか、具体的に話してくださいました。そのおかげで記念誌では、Mon Naraに記されていなかったことを補足して、奈良とベルサイユの交流の歴史をたどることができました。西崎さんの人柄や情熱によって、ベルサイユの人たちから絶大な信頼が寄せられ、縁の下で交流活動が支えられ、年月を経ても交流が続いていることは本当に素晴らしいです。昔から現在に至るまで、個々それぞれのやり方で日仏交流を実践している日仏協会の会員の方たちの活動にも通じ、未来への希望を感じました。懇親会には講演会参加者のほぼ全員が参加し、イタリアンの料理とワインを楽しみながら会員同士の親睦を深めました。(浅井直子)

◆2006年に奈良市とベルサイユ市の姉妹都市20周年を記念して奈良市が催した「ベルサイユ美術展」の企画を任された西崎さんが、ベルサイユから5人の画家を招く展覧会を企画し、翌年、ベルサイユで開催されたこの5人の画家が作成した奈良を題材とした作品の展覧会にも西崎さんが出席して両市の芸術家の交流にご尽力されたこと、画家のひとりであるソレンヌさんとの間に友情が生まれ、互いに尊敬し刺激し合う良い関係が今なお続いていること等が、エピソードを交えつつ生き生きと語られて楽しく勉強させていただきました。国際交流に対する西崎さんの純粋な情熱と誠実さがひしひしと伝わってまいりましたし、この情熱と誠実さが結んだ美しい友情には深い感銘を覚えました。(伏見孝将)

◆この度は、拙い私の話にお付き合いいただき、ありがとうございました。今回の講座のPower Pointを作るにあたり、ソレンヌとの出逢いから今日までを時系列でまとめる作業をしました。初めて出会ったのが2006年でしたから、かれこれ20年になろうとしていることが分かり、改めて深い感慨を覚えています。その間、直接お会いしたのは数回でしたが、季節の挨拶や近況を知らせ合うメールのやり取りを続けてきました。年齢も仕事も全く違う彼女とこれほど長い間交流が続いているのは、何か通じ合うものがあったのだと思います。奈良で彼女が何かを掴み、それを時間をかけて育み、今の仕事に辿り着いていることは、最初の機会に携わった私にとって、何かしら誇らしく感じることであります。講演でも紹介した漢詩にもありますように、「山川異域 風月同天」、住む場所は離れていても、空はつながっている。彼女との縁をこれからも大切に、日仏協会の皆さんとも交流の機会を作れたらいいなあと思っております。(西崎美也子)



## ガヴォー劇場で聴いたモーツァルトの弦楽四重奏曲第 19 番「不協和音」

角田 茂 (つのだ しげる)

国際文化都市パリにおいて、歴史的に有名なクラシック音楽の 3 大コンサートホールというと、シャンゼリゼ劇場、プレイエル劇場、ガヴォー劇場であると思われる。シャンゼリゼ劇場は、この中で最も大きく、1913 年開業、ストラヴィンスキーのバレエ「春の祭典」が初演され、ロン＝ティボー国際コンクール入賞者のガラコンサートにも使われている。初代プレイエル劇場は 1839 年開業であるが、現在の建物は 3 代目で、1927 年開業である。ショパンの愛したピアノの製造会社が建設したホールで、彼はフランスにおける最初の演奏会も最後の演奏会もここでやっている。あの有名なノクターン第 2 番変ホ長調は、社長カミーユ・プレイエルの妻であるマリーに捧げられたと言われている。ガヴォー劇場は 1906 年開業で、プレイエル劇場同様、ピアノ製造会社の建設によるものであるが、



1960 年にこの会社はエラルと合併した。サン＝サーンスやコルトーは、このガヴォー社のピアノを好んだようである。

ガヴォー劇場の座席数は 1000 席と、シャンゼリゼ劇場やプレイエル劇場の半分で、規模は小さくなるが、室内楽の演奏を聴くには最高のホールである。1983 年 12 月 5 日、私はジュリアード弦楽四重奏団の演奏をこの劇場で聴いた。演奏会で最も印象に残っているのは、モーツァルトの弦楽四重奏曲第 19 番ハ長調 K465「不協和音」である。私はかねてより、この曲を弦楽四重奏曲の最高傑作と考え、学生時代からレコードで、スメタナ弦楽四重奏団やアマデウス弦楽四重奏団の演奏を繰り返し聴いていたが、ガヴォー劇場での演奏は、その迫力にびっくりした。



モーツァルト (写真上) は 1782 年から 1785 年にかけて 6 曲の弦楽四重奏曲 (K387, K421, K428, K458, K464, K465) を作曲し、弦楽四重奏曲の父、ハイドン (写真中) に捧げている。この 6 曲の弦楽四重奏曲はハイドンセットと呼ばれ、K465「不協和音」は最後の作品である。モーツァルトは 1785 年 1 月 15 日と 2 月 12 日にハイドンを自宅に招き、この 6 曲を披露したと言われている。ハイドンは 2 回目の訪問時、同席していたモーツァルトの父レオポルト (写真下) に対し、「神と私の名誉にかけて申し上げる。あなたの御子息は、私の知る、あるいは評判で知っている、すべての作曲家のうちで最も偉大な方です」と最大級の賛辞を送ったことは有名である。私はジュリアード弦楽四重奏団による「不協和音」の第 3 楽章、哀愁漂うハ短調のトリオを聴いていると、ふとハイドンがモーツァルトの父、レオポルトに対して語った、あの有名な賛辞の言葉が、急に頭の中に甦ってきた。



私は弦楽四重奏曲が大好きである。この弦楽四重奏曲の創始者として、バロック時代のスカルラッティや、サンマルティーニの名前が挙げられるが、このジャンルを確立させ、発展させたのはウィーン古典派の 3 人、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンである。ハイドンは弦楽四重奏曲の父であると同時に、交響曲の父でもある。ウィーン古典派の 3 人は、弦楽四重奏曲をベースにして、交響曲を構築・発展させている。私にとって弦楽四重奏曲を聴くことは、4 人の個性的な登場人物によって繰り広げられる、知的レベルの高い会話を楽しむようなものである。

## 日本とフランスの郵便文化史あれこれ 樋口順一（ひぐち じゅんいち）

私が奈良交通に勤務していた頃、会社は郵政省からの委託を受け奈良県内の郵便物の輸送を行っていました。郵便局と同じデザインの赤い郵便車で輸送していましたので、県民の皆さんはあまりそのことをご存じないと思います。そんな折、私は郵便事業の将来を勉強するはめになり、日本の郵便文化史に興味をもちました。小林正義著『みんなの郵便文化史』（株式会社じゅうに、2002年）の本を参照しながら、挿話をいくつか紹介してみます。

我が国の郵便制度は、「郵便の父」と言われる前島密が1871（明治4）年に近代的郵便事業を創業したのが始まりです。それまでの飛脚便は、主要地間のみの限られた地域・区間の通信制度で、どこにでも届くわけではなく、料金が高く、誰でも気軽に利用できませんでした。近代的な郵便制度がスタートした頃は、手紙（書状）を書いたことがある人は極めて少なかったため、開業に先立ち、手紙の書き方から知ってもらう必要がありました。また新式郵便は目新しいことばかりで、書き方ばかりでなく制度のイロハから、庶民に説明しなければなりませんでした。

まずポストですが、「書状箱」（画像左端）あるいは「集信函」と称していました。設置場所は「函（箱）場（はこば）」と云い、その近くに郵便切手を販売する「書状切手売捌処（しょじょうきってうりさばきしょ）」が設けられました。「書状を出す人の心得」が発表され、切手はのりづけして、書状の裏側（創業時は裏に貼った）にしっかり貼りつけることが注意されています。当時、便せん封筒も今日のように市販されておらず、便箋を入手するのも容易ではありませんでした。厚手の紙を使うと重量がかさむため、薄い紙を用いて文字は細字でといったような細部まで周知する必要がありました。郵便物を保護し、通信の秘密を守るため誤配による通信の秘密の漏洩を防ぐ方法として、宛先と差出人それぞれの住所を綿密に、家の番地まで記すよう指示されています。かつては、同一地帯に100所帯以上の家があることも多かったそうですから、配達は大変だったことが想像されます。

「郵便」の名称は前島密が、信書を届ける新しい通信システムを、従来の飛脚便と区別するため、「郵便」とよぶよう準備していたといわれています。創業当時に郵便を取り扱う機関の名称は郵便役所でした。1875（明治8）年、ワシントンでの日米郵便交換条約締結後、外国郵便業務が開始され、「郵便局」と改称される契機となりました。

1872（明治5）年7月から郵便制度は全国的に実施され、東京～横浜間で、現在の現金書留にあたる金子入（きんすいり）書状の取り扱いが始まります。1873（明治6）年に郵便事業が国の独占事業とされると、取り扱いが全国的に始まります。一度に送ることができる金額は50円まででした。巡査の初任給が一月4円の時代ですから、ほぼ一年分の給料に相当します。運送途中の郵便物が襲われることが懸念され、1873（明治6）年6月に「短銃取扱規則」が制定され、遞送人がピストルを携帯することとなります。目的は、郵便物に危害を加えようとする者への正当防衛、そして猛獣の被害への対策のためでもあったそうです。当時の郵便遞送集配人の苦労が伺われます。

さて、日本の郵便の歴史を調べているうちに、フランスの郵便制度にも興味をわいてきましたので、ネットで検索したことを以下に記してみます。1464年に国王ルイ11世が軍事と行政上の通信を円滑にするため、フランス全土に「リレー（中継所）」を配置したのが始まりです。1672年郵便事業は国家の独占事業となり、民間のメッセンジャーは排除もしくは買収されました。1719年パリ大学が保持していた最後の郵便特権も国に返還され、1759年パリ市内で自宅まで手紙を届けるサービスが始まり、1786年に全国の都市へと拡大されました。フランス革命後の1793年、郵便は完全に国営機関となり、1804年に大蔵省の管轄下に置かれました。1830年「地方郵便法」によって、それまで都市部中心だった郵便サービスがフランス全土の村や集落まで拡大されました。1849年に郵便切手が導入され、「差出人による前払い制」が浸透しました。それまでは受取人が料金を支払うのが一般的でした。こうしてみると、フランスでは日本の明治維新以前に、郵便制度が確立されていたことがわかります。

フランスにはパリのモンパルナス駅近くに「郵便博物館」があり、中世の伝言システム、馬車郵便、歴代郵便ポスト、郵便屋の制服などが展示されていて、フランスの日常生活の歴史を学ぶことができます（日本には東京スカイツリータウン・ソラマチ9Fに「郵政博物館」があります）。日本とフランスのポストの写真を比べてみると、日本では赤色が多く、フランスでは日本にない黄色のポストがあることに気づきます。近年、メールの普及でポストに郵便物を入れる機会は減っていますが、この小さな箱に郵便物を入れれば、日本国内だけでなくフランスをはじめ世界中に手紙が届く郵便制度は、なくなってもらっては困るよう思われます。



日本のポスト



フランスのポスト

文化交流活動をふりかえって 東山泰子（とうやま やすこ）

奈良日仏協会が1994年4月に発足した翌年か翌々年、協会の立ち上げに尽力された野島正興さんが当時NHK奈良放送局でアナウンサーをされていて、私どもの霊山寺のバラ園を取材してテレビで紹介してくださいました。その折に野島さんからお誘いを受けて、日仏協会に入会いたしました。

その頃、1998年から2000年まで日仏協会の第2代会長を務められた南都銀行頭取の阪本龍児さんと個人的に親しくさせていただいていました。1999年・2000年には奈良日仏協会の総会やフランス祭を霊山寺で開催し、講演やシャンソンコンサートを楽しみました。阪本さんは「奈良は平城京の昔からお寺が中心的な役割を果たしてきたのだから、仏教のことはさておいても、お寺がもっと文化を発信していったらいいと思う」と折々に仰っておられました。日仏協会の立ち上げに関わり副会長も務めておられた斑鳩町浄慶寺の児玉厚雄さんがその考えに賛同されて、阪本さんと児玉さんが中心となって、「仏教と文化を考える会」が作られました。そこに私も入れていただいて協力することになり、様々なコンサートや勉強会のようなことをやって行こうという気になりました。阪本さん、児玉さん、私は日仏協会の会員ではありませんでしたが、そうした活動は日仏協会とはまったく別に、活発に進展していきました。

他には、私自身それ以前の1986年に国際ソロプチミスト奈良に入会し、同年に奈良市とベルサイユ市の姉妹都市締結がなされたこともあり（西田栄三市長とアンドレ・ダミアン市長）、両市の文化交流活動に関わっていました。1996年にソロプチミスト奈良の会長に就任した時には、ソロプチミストベルサイユとフレンドシップ・リンク（FL）の締結を計画し、翌年1997年に正式調印の運びとなりました。その時にお世話をしてくださったのが、当時の奈良市長の大川靖則さん（在任期間1992～2004）とベルサイユで画家として活躍されていた大石良太さんです。

1997年はちょうど、ソロプチミスト奈良が25周年、ソロプチミストベルサイユが50周年の記念の年にあたり、奈良から12名がベルサイユを訪問し共に祝うことができました。夕食会はシャンデリアの煌めくベルサイユらしい会場で128名もの方が出席。私はBonsoirだけフランス語であとは日本語でスピーチしましたが、大石さんのお嬢様が通訳をしてくださいました。このFL締結がきっかけとなり、その後、何度もベルサイユを訪れるようになりました。

2007年3月下旬、ベルサイユで展覧会が開催された時には、ベルサイユの画家のひとりとして参加したソレンヌ・エロワさんが、ご自宅でパーティーを開いて私たち一行を招いてくださいました。後日には、一行でベルサイユ市街を散策したりして、とても楽しい旅でした。

2012年11月、ソロプチミスト奈良の40周年記念に、ベルサイユからの一行をお迎えすることになり、日仏協会に協力をお願いしました。仲井秀昭さん、濱恵介さん、小寺順子さんが通訳のお手伝いに来てくださり、記念式典・祝賀会・観光案内など、ずいぶん助けてもらいました。

ソロプチミストの活動でベルサイユの方たちと交流するようになってから、私もフランス語を話せるようになりたいと思い、藤原町のオリヴィエ・ジャメ先生のところに2年ほど通っていたことがあります。初心者クラスのはずなのですが、その日にあったことや、今思っていることを受講生のみなさんがフランス語で流暢に話されるのには驚きました。その後、高畑町でカフェをしているミリアムさんのところに個人レッスンを受けに行くようになりました。ミリアムさんとご主人の坂本さんとは昔から懇意にっていて、毎年8月の終戦記念日には霊山寺での「平和へのねがい」コンサートで坂本さんに歌ってもらっていました。ミリアムさんの自宅でのフランス語のレッスンでは、本を一冊終えることができました。

若い頃はお寺に嫁ぐなどは思いもよらず、海外へ行きたいと思って大学は英文科でした。文化発信の一端としていろんな方たちとのインタビューを掲載してお寺から発行していた小冊子に、当時はまだ珍しかった英語のタイトルを使ったりもしました。

ふりかえれば、いろんな活動に携わって、たくさんの素晴らしい出会いに恵まれてきました。感謝の念とともに、様々なご縁がどこかで一つにつながっていくのが不思議なことに思える今日この頃です。



1997年ベルサイユ訪問 上：市庁舎にて。中央に大石良太さん、その右が私、後ろに架かっているのは大石さんの作品。下：夕食会



2007年3月、ベルサイユの街角にて



2012年、ベルサイユからの一行を奈良に迎える。上：お抹茶のお接待 下：霊山寺のバラ園散策

## 生け花を通じて交流

ジョジアンヌ・ジョワ

Je m'appelle Josiane Joie, j'habite en France, dans le département des Landes situé dans le Sud-Ouest, bordé par l'océan Atlantique. J'ai découvert l'ikebana en 1982 lors d'une exposition de céramiques où étaient présentées quelques compositions Ikebana. J'ai été émue par la sobriété de ces bouquets épurés et raffinés. J'ai contacté Marcel Vrignaud Grand Maître Ikebana Ohara, *Meiyo Ichijikin*, Il m'a transmis son savoir et sa passion durant de longues années. Cet art issu du Bouddhisme m'a conduit à plus de rigueur, de lâcher prise, d'acceptation de l'éphémère avec le désir de mieux connaître la culture Japonaise.

En 2000, j'ai eu la possibilité de vivre quelques semaines dans une famille de Morioka. J'ai rencontré Fumiaki Yanagisawa professeur de Français à l'université de Morioka et son épouse Yukiko professeur de Français dans une université du temps libre. En 2001, nous les avons reçu dans nos familles avec un groupe de 9 personnes. Lors d'un deuxième voyage au Japon en 2003, Fumiaki a contacté Hiroshi Onishi pour nous faire visiter Nara. Ce fut une très belle rencontre et le début d'échanges amicaux entre Nara et les Landes. Par la suite j'ai effectué plusieurs voyages au Japon avec mes élèves. Nara fait toujours partie de notre périple.

En 2008, Hiroshi Onishi nous a fait rencontrer les membres de l'Association Franco-Japonaise de Nara, nous avons été enthousiasmés par ces échanges fructueux dans un cadre chaleureux et convivial, de vraies rencontres favorisant ainsi une connaissance, une sensibilité à une culture bien différente de la nôtre. Une façon de transcender les frontières et de créer de vrais liens d'amitié.

En 2023, notre groupe de 9 personnes a fait étape à Nara, accueillis par l'Association Franco-Japonaise. L'ambiance était joyeuse lors de nos visites et de nos repas pris en commun. Merci Hiro de vous investir pour nous faire découvrir en flânant le centre authentique de Nara. L'ikebana est toujours présent dans ma vie, j'ai de nombreux élèves et je fais partie de l'association Européenne des Maîtres Ohara. Rattachée au chapitre La Rochelle, j'organise des stages avec le Professeur Satoshi Hirota de Shikoku. J'espère pouvoir visiter Nara à nouveau un jour.

(Josiane Joie)

ジョジアンヌ・ジョワと申します。フランス南西部、大西洋に面したランド県に住んでいます。1982年の陶芸展で展示されていた生け花の作品に出会い、純化され洗練されたそれらの花束の簡潔さに心を動かされました。「いけばな小原流」の師範「名誉一時金」のマルセル・ヴリニョー氏に連絡をとると、氏はそれから長年にわたって、持てる知識と情熱を私に伝授してくださいました。仏教に由来するこの芸術は、日本文化をもっと知りたいという望みとともに、私をさらなる厳しさ、解放、儚さの受容へと導いてくれました。

2000年に盛岡のあるご家族のもとで数週間過ごす機会がありました。そこで、盛岡大学フランス語教授の柳沢文昭さんと、大学でフランス語の非常勤講師を務める妻の由紀子さんに出会いました。2001年、彼ら9人の一行を私たちの家族のもとにお迎えしました。2003年、2度目の日本旅行の折に、文昭さんは大西弘さんに連絡を取って、私たちの奈良訪問を手配してくれました。それは素晴らしい出会いであり、奈良とランドの友好交流の始まりでした。その後、私は何度も生け花の生徒たちと日本を訪れましたが、奈良はいつも私たちの旅程に含まれています。

2008年、大西弘さんは私たちを奈良日仏協会の会員に紹介してくれました。温かく歓迎的な雰囲気の中で、実りある交流ができたことは私たちにとって大きな喜びでした。本物の出会いは、私たちとは異なる文化に対する理解や感受性を深めてくれます。それは、国境を越えて真の友情の絆を築くひとつの方法です。

2023年、私たち9人の一行が奈良を訪れると、日仏協会が迎え入れてくれました。見物や食事を共にした時は、とても楽しい雰囲気でした。ヒロさん(大西さんのこと)、奈良の街を散策しながら、私たちがその核心に触れられるよう尽力してください、ありがとうございました。生け花はずっと私の人生に深く根づいています。たくさん生徒がいて、ヨーロッパ小原流師範協会のメンバーでもあります。ラ・ロシェル支部に所属し、四国の広田智教授との講習会を企画しています。奈良に再訪する日がくることを楽しみにしています。



## 日仏交流の実践

小寺 順子 (こてら じゅんこ)

私は現在、SERVAS (サーヴァス) と Couchsurfing (カウチサーフィン) という二つの国際交流組織に属している。これまでこの組織を通じて、たくさんの外国の方たちと知り合い、交流し、楽しい経験をしてきた。

はじめに、2025年11月、SERVAS を通じて知ったフランス人のローラさん (写真左) との交流を紹介したい。ローラさんはチャーミングな20代の女性で、二泊三日で我が家に泊めることになり、春日大社、東大寺、興福寺、ならまちなどに案内した。東大寺は大仏殿のあたりは観光客で混み合っているが、そこから東の若草山の方に向かってゆるやかな坂道を上って二月堂 (写真中) まで行くと、訪れる人はぐっと減って、落ち着いた雰囲気になる。二月堂は入場料無料で、休憩所にはお茶のサービスもある。毎年三月にはここで「お水取り」の行事が行われる。回廊からは奈良市内の景色が見渡せて、素晴らしい眺望が楽しめる (写真右)。ローラさんもすごく気に入ってくれて、いっしょに散策を楽しんだ。短期間でもいろんな話ができて、フランスのことを教えてもらったり、自分の住みなれた奈良の土地が新鮮に感じられたりもした。

つづいて、SERVAS (1972年設立) と Couchsurfing (2004年設立) について紹介しよう。いずれも平和の理念のもとで、文化の交換をすすめる国際交流の世界的な組織である。会員になると、例えば、フランスのリヨンで泊まりたいと思った時、PCでリヨンのサイトに掲載されているメンバーのプロフィールを読んで、自分に適した人を見つけ、メールを送る。OKなら返事が来て、その人の家に泊めてもらうことができる。逆に、私のところに泊めてほしいという要請のメールがくることもあり、もしOKならメールで返事をする。受け入れるのも、入れないのも自由だ。自分が旅行する時だけ使う人もいれば、受け入れだけを楽しんでいる人もいる。ただ泊めるだけの場合もあれば、朝食や夕食を提供する場合もある。時間があれば観光案内をすることもある。現地での出会いは様々で、直接家まで行ったり、駅や指定した場所で待ち合わせしたりする。SERVAS には2泊という規則があるが、Couchsurfing は何日でも宿泊を希望することができる。

二つの組織とも、全くのボランティアでお金は一切要求してはならない。SERVAS の会員は比較的年長者が多く、受け入れも待遇が手厚い。私の場合、朝クロワッサンを焼いてくれたり、車で観光に連れて行ってもらったこともある。Couchsurfing は、人によっては寝袋を持っていかなければならなかったり、文字通りカウチの上で寝るといったこともある。そうしたことは事前に情報が書いてあるので、一部屋用意してほしいときはその条件に当てはまるホストを探せばよい。

私自身は渡航する時はSERVAS を使うことが多い。受け入れに関してはCouchsurfing の会員からの要請が、世界中から毎日のように届くが、今はフランス人だけを泊めることにしている。朝食は必ず作ることにしているが、夕食はゲストに本場のフランスの家庭料理を作ってもらうこともある。時間のある時は奈良観光に連れて行く。SERVAS は会員になるとネームカードがもらえ無料で寺に入れてもらうことができる。ただ、会員の心得としては、費用を節約するためではなく、本当にお互いの国の文化に興味を持つことが肝要だと思う。会員は最低英語はできるが、フランス語ができる人は少ないので、フランス人にはとても喜ばれている。SERVAS の近畿支部では、会員同士の交流があり定期的に懇親会を開いている。

SERVAS を通じて旅をすると、その国の家庭を間近に感じることもできるし、車でしか行けないところへ連れて行ってもらうこともできる。一度泊めたゲストと懇意になって、後日そのゲストの家にステイし、友達になることもある。国際文化交流に興味のある人は、普通の観光旅行とは一味違った体験ができるので、ぜひこの組織の存在を知ってほしい。(ネットで「SERVAS」「Couchsurfing」と入力して検索すれば、より詳細な情報が得られます。)



## ルーブル美術館での作品展を終えて

赤木睦代（あかぎ むつよ）

2025年10月17日～19日、皆様の御支援のおかげで、念願のルーブル美術館（カルーセル・デュ・ルーブル）にて展覧会を開催することができました。

牛の原始的なエネルギーに魅せられ、50年近く牛を描き続けてきました。さまざまな牛の表情を求め、日本をはじめ、フランス、スペイン、モロッコなど約30か国を訪れました。牛は常にシンプルでユーモアのある表情をしており、その土着性を肌で感じさせてくれます。私はそれを、吉野杉の焼き板に「生への賛歌」として描いています。今回のルーブル個展には、300人ほどの外国の方が見に来てくださいました。

大盛況の中、スイスのテレビ局の取材を受け（中央写真）、スイスにてその様子が放映されました。ルーブルの公式サイトには、「太陽と月の間」の作品が掲載され、それをウクライナ出身のオレナさんという方が気に入って、キーウのお部屋に飾ってくれています（右写真）。オレナさんからいただいた「あなたの作品は素晴らしいです。とても鮮やかで力強く、それでいて明るく平和に満ちています。これら全てを実現し、傑作に仕上げたあなたに拍手を送ります」という手紙に励まされています。これからも絵を通して、日本と様々な国の方々との交流促進の一助となるよう精進してまいります。



## 第10回美術クラブ 松伯美術館特別展「上村三代と京都市立芸術大学」鑑賞会

奈良とも縁の深い上村松園、松篁、淳之三代の画業について、京都市立芸術大学で上村松篁、淳之とも親交のあったフランス文学者柏木加代子さんよりお話をうかがったあと、松伯美術館特別展を鑑賞します。

❖日時：2026年3月14日（土）13:00～17:00

❖講演会：13:00～14:50 会場：生駒セイセイビル 4階 401号室

❖特別展鑑賞会：15:30～17:00 会場：松伯美術館（近鉄学園前駅よりバス「大淵橋（松伯美術館前）」）

❖ナビゲーター：柏木加代子（京都市立芸術大学名誉教授）

❖参加費：会員500円、一般1,000円 ❖申込先：sugitani@kcn.jp TEL.090-6322-0672（杉谷）

❖柏木加代子さんからのメッセージ：小著『磨く松園、見る松篁、誘う淳之』（大垣書店、2025年）がきっかけで、第10回美術クラブ例会で上村家三代の画業の軌跡をお話しさせていただくことになりました。

小著では、1880年開校の京都市立芸大における日仏文化交流のルーツを、芸大創立の立役者の一人で、松園とも親しかった久保田米僊のパリ遠征日誌（1889年のパリ万博）を手掛かりに、日本画と西洋の関係についても触れています。今回はまず松園の出世作《四季美人図》を取り上げて、その絵画が視覚のみならず、「香りを聞く」ことがその底にあることに注目したいと思います。松園は香道の妙味に早くから着目し、その画法の基本としていました。香を「聞く」とは、ただ匂いを嗅ぐのではなく、そこに季節の移ろいや物語を想像し、五感で深く味わうことにあり、それを絵として描出する試みでした。松園が嗅覚とすれば、息子松篁は、視覚を迫及して深奥に入り込み、事物の本質に迫ります。また彼は教育者として、新しい日本画創造の道を開く役割を果たしました。孫淳之の花鳥画への道は、復興から高度成長する戦後、アッシジで見たジョット《小鳥への説教》に感動したことから始まります。私が京都芸大に職を得た1979年は、松篁は11年前に退官、淳之の壮年期にあたりますが、お二人に間近で接し、言葉を交わし、パリでの講演にも通訳として同行した思い出を踏まえながら、三代の画業を私なりに振り返り、また松伯美術館に場を移して、ご一緒に鑑賞できれば幸いです。



上村松園《菊の香》公益財団法人 吉野石膏美術振興財団蔵

2026 年度ガイドクラブの案内「法隆寺訪問」(4/12)のご案内

今年度のガイドクラブは4月12日(日)午後、斑鳩町の法隆寺に訪れます。法隆寺は日本の歴史において重要な役割をはたした聖徳太子ゆかりのお寺です。1993年「法隆寺地域の仏教建造物」として日本で最初にユネスコの世界遺産に登録されました。泥や土をつき固めて作られた築地塀(ついじべい)などを間近に見ると、日本古来の木造建築の奥深さを肌で感じる事ができるでしょう。当日は、法隆寺のボランティアガイドの方の案内で、西院伽藍、金堂、夢殿、百済観音像や玉虫厨子が安置されている大宝蔵院などをめぐります。

- ❖日時：4月12日(日)13:40~16:20
- ❖集合：13:40「法隆寺 i センター」内
- ❖参加費：会員とフランコフォン無料
- ❖申込締切：3月31日 ❖定員：15名(先着順)
- ❖当日進行：13:40~14:00 概要説明  
14:00~16:00 ボランティアガイドによる案内  
16:00「法隆寺 i センター」に戻る  
16:00~16:20 休憩 16:20 解散



❖問い合わせ&申込先：Nasai206@gmail.com tel. 070-1731-0230 (浅井)

法隆寺は JR 法隆寺駅から徒歩約 20 分ですが、駅から法隆寺までの行き方は、参加申込者に直接連絡いたします。なお、解散後は JR 法隆寺駅近くの居酒屋にて懇親会を開催します。(自由参加、参加費自己負担)

※右の画像は、聖徳宗総本山法隆寺発行の「法隆寺略縁起」のパンフレットより転載させて頂きました。



《2025 年度第 6 回理事会報告》...事務局

日時：2026 年 1 月 15 日(木) 15:00~16:25。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、杉谷、菌田、中辻、喜多、藤村、三木。議題 1. 会員数確認。議題 2. 11/20 理事会後の活動：秋の教養講座(11/23)。議題 3. 今後の行事：(3/1) 第 67 回シネクラブ例会「アラン・ドロン追悼③『太陽がいっぱい』、(3/14) 美術クラブ「松柏美術館特別展」鑑賞会、(4/12) ガイドクラブ「法隆寺訪問」。議題 4. 年次総会：(2/11)菜宴にて、(1/21)総会案内発送、式次第と概要、2025 年度活動報告・決算報告・会計監査報告・2026 年度役員改選・活動計画・予算・懇親会。議題 5. Mon Nara 通信 No.23、Mon Nara No.310 予定 2/19 発送予定。議題 6.その他：2025 年度決算打ち合わせ(1/8)、次回理事会 3 月 19 日(木) 15:00~16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆ フキは日本原産の植物。切れこみの入った大きな葉はハート型をしています。アイヌの伝承ではフキの葉の下に住む小人「コロポックル」はアイヌ民族以前の先住民で、夜中に食べ物を置いて行ってくれる優しい神様とされています。☆本州でも 2 月のまだ寒い頃に薄黄緑色の花を咲かせ、蕾のフキノトウを天ぷらにすると、ほんのりした苦味が春の到来を感じさせてくれます。4 月から 5 月に、50~60cm にも成長した茎が食料品店の売り場に並ぶと、煮物が食べたくなります。☆フキはいかにも日本的な食材でヨーロッパには存在しませんが、細長い茎の見た目が似ているハーブに「ルバーブ」(rhubarbe)があります。以前 4 月にフランスのノルマンディー地方のゲストハウスに宿泊した時、宿の人が朝食に自家菜園で収穫したルバーブのジャムを出してくれたことがありました。原産はシベリアですが、北ヨーロッパの寒い地方では広く栽培されているようです。昨夏、会員の方が病床から、昔イギリスのウェールズ地方に旅した時、生のルバーブを食べたらシャキシャキしてとても美味しかったという便りを寄せてくれました。現在では信州地方などでルバーブのジャムが売られているようですが、いつかフランスで生のルバーブを食してみたいと思います。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2026 年 6 月号は **5 月 31 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行) 又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行) に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2026 年 2 月号 numéro 310

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : http://www.afjn.jp E-mail : nara.afj@gmail.com TEL : 090-6322-0672

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司